



対訳で楽しむ 『女の一生』⁶

永田千奈

女の一生キャラ図鑑もいよいよ最終回である。体格も性格もすべてが対称的な二人の司祭、美女と野獣カップルのフルヴィル伯爵夫妻、可愛いペットでは片づけられない飼犬のマサックル……と紹介したい個性派脇役キャラはまだほかにもあるのだが、最後にもういちどジャンヌをとりあげる。

修道院を出たばかり、世間知らずの「夢みるお馬鹿さん」だったジャンヌは、ジュリアンと結婚。だが、いざ結婚生活が始まってみると、夫は、女中ロザリに手を出して妊娠させたばかりか、伯爵夫人と不倫関係に陥り、悲惨な死を迎える。溺愛した息子も今では音信不通、どこかで女と暮らしており、金の無心以外には連絡をよこさない。老け込んでしまったジャンヌに、かつてのかわいらしさ、若々しさはない。「愚痴っばいオバサン」と化したジャンヌは、再会したロザリを前に自分の不幸を嘆く。

Jeanne lui reprit les mains et les garda dans les siennes ; puis elle prononça lentement, toujours poursuivie par la pensée qui l'obsédait :

— Oh ! moi, je n'ai pas eu de chance. Tout a mal tourné pour moi. La fatalité s'est acharnée sur ma vie¹⁾.

Mais Rosalie hocha la tête :

— Faut pas dire ça, madame, faut pas dire ça. Vous avez mal été mariée, v'là tout²⁾. On n'se marie pas comme ça aussi, sans seulement connaître son prétendu.

Et elles continuèrent à parler d'elles ainsi qu'auraient fait deux vieilles amies. Le soleil se leva comme elles causaient encore.

訳 ジャンヌはロザリの手を取り、自分の手で包むように握り締めた。ジャンヌは、これまでずっとつきまどってきた思いを捨てきれぬまま、ゆっくりと話した。「ああ、私は運が悪かった。何もかも、うまくいかなかった。不幸な運命から逃れられなかった」

だが、ロザリは首を振った。「ジャンヌ様、そんなこと言っちゃいけません。いけませんったら。結婚相手がいけなかつただけです。相手のことをよく知らないまま結婚したって、うまくいく人もあれば、いかない人もあるんですからね」

二人は、古くからの友人のように、互いのことを話し続けた。

夜が明けても、ふたりはまだ話がつきなかった。

注 1) 直訳すると「不幸な運命が私の人生に執拗に襲いかかってきた」2) = voilà tout ノルマンディーのなまりを表す。

ロザリがここまで言い切ることができるのは、自身もまったく面識のなかった相手に嫁いでいるからである。ジャンヌの夫は「ハズレ」だったが、ロザリの夫は「アタリ」だった。真面目によく働く、いい夫だったという。しかも、ロザリの息子は実に優しい孝行息子に育っていた。乳姉妹として育ち、かたや貴族、かたや農婦という人生を歩んだ二人の女性。二人は表裏一体であり、幸不幸、運不運もまた交錯する。恵まれた環境にいたはずのジャンヌが必ずしも幸福とは限らない。長年、働きづめだったロザリは、自身の人生に満足している。この二人の姿こそ、モーパッサンの描く現実であった。

ロザリの勧めで屋敷を手放したジャンヌは、田舎の一軒家に移り住み、周辺の野山を歩くことでせめても気を晴らそうとする。

Il lui semblait aussi que quelque chose était un peu changé partout autour d'elle. Le soleil devait être un peu moins chaud que dans sa jeunesse, le ciel un peu moins bleu, l'herbe un peu moins verte ; et les fleurs, plus pâles et moins odorantes, n'enivraient plus tout à fait autant³⁾.

Dans certains jours, cependant, un tel bien-être de vie la pénétrait, qu'elle se reprenait à rêvasser, à espérer, à attendre ; car peut-on, malgré la rigueur acharnée du sort, ne pas espérer toujours, quand il fait beau⁴⁾ ?

訳 自分だけではなく、まわりのものもすべて、何かが少しだけ変わってしまった。太陽の光さえ、昔ほど暖かく感じない。空の青さも昔ほどではない。草の緑も昔のほうが濃かったような気がするし、花も、以前はもっと色鮮やかで香りも強かったような気がするのだ。そんなふうに思い始めると、かつてのよううっとりしていた気持ちもさめてしまう。

それでも、生きる喜びを感じる日もある。そんな日は、夢にふけり、望みを抱いたり、期待したりもする。運命がどんなに過酷なものであろうが、晴れた空を見ていると、つい希望を抱いてしまうのが人間というものだろう。

注 3) 直訳すると、「昔よりも色の薄く、香りも弱い花は、かつてのようにジャンヌを酔わせることはない」だが、花が主語よりも、人（ジャンヌ）を主語にしたほうが感情が伝わりやすい。4) ここでの on は、漠然と人を指す。

ある日、ジャンヌのもとに息子ポールから手紙が届く。それは、これまでの金を無心する手紙よりもさらに切迫した内容のものだった。ポールの恋人が子供を産み、産褥熱で死の床にあるというのだ。呆然とするジャンヌを前に、ロザリは、恋人が生きているうちに婚姻届を出して、子供の戸籍を作るべきだと助言し、さっそく単身パリに向かう。ポールの妻となった女は息を引き取ったが、生まれたばかりの赤ん坊はポールの娘、ジャンヌの孫として出生届をだすことができた。ロザリが生まれたばかりの赤ん坊を連れ、パリから戻ってくる日、ジャンヌは駅まで迎えに出る。ロザリから赤ん坊を渡され、腕に抱いたものの、ジャンヌにはまだ実感がわからない。ジャンヌは、そのままロザリとともに馬車に乗り込み、家路につく。そしてラスト・シーン。

Et Jeanne regardait droit devant elle en l'air, dans le ciel que coupait, comme des fusées, le vol cintré des hirondelles. Et soudain une tiédeur douce, une chaleur de vie traversant ses robes, gagna ses jambes, pénétra sa chair ; c'était la chaleur du petit être³⁾ qui dormait sur ses genoux.

Alors une émotion infinie l'envahit. Elle découvrit brusquement la figure de l'enfant qu'elle n'avait pas encore vue : la fille de son fils. Et comme la frêle créature, frappée par la lumière vive, ouvrait ses yeux bleus en remuant la bouche, Jeanne se mit à l'embrasser furieusement, la soulevant dans ses bras, la criblant de baisers.

Mais Rosalie, contente et bourrue, l'arrêta.

— Voyons, voyons, madame Jeanne, finissez ; vous allez la faire crier.

Puis elle ajouta, répondant sans doute à sa propre pensée :

— La vie, voyez-vous, ça n'est jamais si bon ni si mauvais qu'on croit.

訳 ジャンヌは、ただまっすぐ目の前の空を見ていた。その空を、飛び散る火花のように、ツバメが弧を描いて横切る。ジャンヌはふと、服を通して柔らかな温かみ、命のぬくもりを感じた。ぬくもりは、やがて、足元へ、身体の芯へとじんわり広がっていく。膝に乗せた赤ん坊が温かいのだ。

ジャンヌは、果てしない思いに満たされるのを感じた。とつぜん思い立ち、まだ見ていなかった赤ん坊の顔を見つめる。この子が、ポールの血を引く娘なのだ。急にまぶしい光を浴びて驚いたのだろうか、小さくか弱い赤子は青い目を見開き、口を動かした。ジ

ャンヌは思わず赤ん坊を抱え上げ、口づけを浴びせながら、感情のままに抱きしめた。

だが、人心地ついたロザリが無愛想な調子でジャンヌをたしなめる。「ほらほら、ジャンヌ様、いいかげんになさいまし。赤ん坊が泣き出しますよ」

そして、ロザリは、自身の思いに応えるようにつけ足した。「ねえ、ジャンヌ様、人生ってのは、皆が思うほど良いものでも、悪いものでもないんですね」

注 5) 赤ん坊のこと

タイトルは une vie、ラスト・シーンには une chaleur de vie が出てきて、la vie を語って終わる。日本語では vie を生活、人生、生命……などと訳し分けているが、原文で読むと、vie という言葉に込められたいくつもの意味が、ここに集約されるような印象がある。ここはやはり、原文で読んでこそその味わいだろう。女の一生キャラ図鑑と称して、6回にわたり主要人物を見てきた。個性派揃いの脇役に比べ、ヒロインのジャンヌは、ヒロイズムとは無縁の地味な存在だ。そのジャンヌに密着することで、淡々と日々を生きる人の営み、さらにはどんな人物にも人生があるという事実をモーパッサンは描いてみせたのである。

その後のジャンヌ

作者モーパッサンは42歳でその生涯を閉じた。肖像写真（10月号の本欄に掲載）のせいか、もっと「オジサン」だと思っていたのだが、実はずいぶん若かったのである（ちなみに『女の一生』執筆時は33歳）。実際のところ、子供の時に「オバサン」だと思っていた人が、今にして思えばけっこう若かったのね、というのはよくある話だ。さて、『女の一生』の最後の場面、孫娘を抱き「おばあちゃん」になったジャンヌだが、10代で結婚し、息子ポールを産んでいるので、実はまだ40代なかば。今のような長寿社会ではないにしろ、彼女の人生はまだ終わってはいない。放蕩息子ポールはこれを機に心を入れ替えるのか。ジャンヌは、この先もロザリの助けを借りながら、孫娘を育て上げるのか。はたまた、息子や孫にまたもや裏切られ、失意の晩年を送るのか……。あれこれ想像してみるのには読者の自由である。自然主義文学の代表作として時代性を読み解くもよし、キャラ図鑑として人物描写を楽しむもよし、『女の一生』の読み方はひとつではない。半年にわたるおつきあい、どうもありがとうございました。

※ 原文は *Une vie*, Le Livre de Poche 版から引用。

※ 訳文は拙訳『女の一生』（光文社古典新訳文庫）を使用。

（ながた・ちな）